

「若者の海外旅行離れ」に関する考察

廣岡 裕一

1. はじめに

若者が海外旅行離れをしているという。

日本人の海外渡航者数は、1990年に1000万人を超えた。このころは、この調子でいけば2000年には、2000万人くらいは軽く突破できているだろうと考えていたが、今にいたって、日本人の海外渡航者数が2000万人を超えた年はない。むしろ、2000年に1782万人がピークでこの年以降この数を超えられない。2001年は9.11、2003年はSARS等が影響して、その数は減少した。そして、昨年、2007年は、特に、大きな事件がなかったものの対前年比で減少している。さらに、2008年の途中経過を見ているも、上期を終えて対前年比で下回っており、芳しい状況ではない。

旅行業界では、この現象は、市場の成熟化が原因だとかたづけることなく、海外旅行業界の危機ととらえ解決を図っていかねばならないと痛感されている。

そして、当然、海外旅行者数が伸びない原因は何であるかという疑問が呈される。そうした中、JATAでは、ビジット・ワールド・キャンペーン事業計画を掲げ、2008年、4月「VWC 2000万人推進室」が設置され、海外渡航者数2000万人を達成しようと行動を始めた。

この報告は、その一環で、海外旅行者数が伸びない原因は探り、その解決のための端緒を見つけることにある。

2. 「若者が海外旅行離れ」についての事実の整理

若者が海外旅行離れをしていることは事実である。このことは、旅行業界関係者であれば、何らかの形で耳にし、あるいは、実務において感覚的に感じ取っているかもしれない。

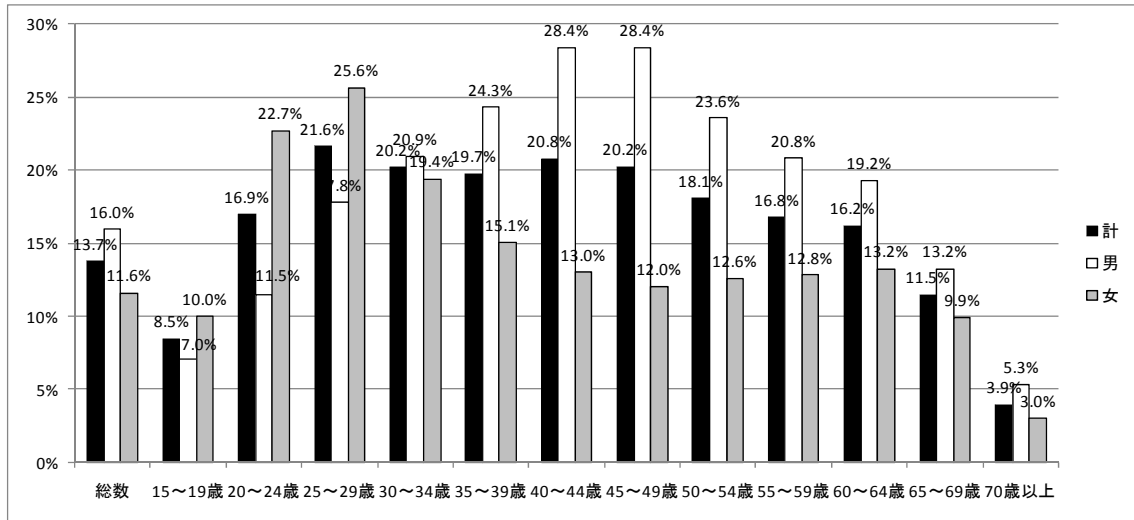
しかし、データとして実際の数値を確認は、市場分析などをされているマーケティング担当者以外では、少ないのではないだろうか。そこで、まず、若者の海外旅行離れをデータとして確認してみる。

図表1は、2007年の出国率を示したものである。日本人全体の出国率は、13%台である。これは、諸外国と比較すると相対的に低い。例えば、イギリス113%台で1人が1年に1回以上出国し、ドイツでは93%台である。これらヨーロッパの旅行送出大国には、遠く及ばないことは、地理的条件等から当然視されるかもしれない。だが、海に囲まれた日本と同じように、事実上、陸路出国ができない韓国の23%台や台湾の37%台、オーストラリアの23%台と比べても画然と少ない。

そうした中で、図表1の男女計の示す部分をみると「25～29歳」の出国率が最も高いことがわかる。男性の出国率が高いのは40歳代であるが、女性においては、20代後半を

ピークに20代において高い出国率を示している。つまり、20代の高出国率は女性が支えているといえる。

図表1 2007年の出国率



※<http://www.e-stat.go.jp> より作成

20代の男性の出国率は、高くはないが、海外渡航者の中には、当然、業務渡航者も含まれる。20代の若者は、業務渡航者以外の渡航の占める割合が多いと思え、海外渡航者数の伸張の寄与には、こうした自発的意思が求められる海外旅行の割合が高い20代の若者の旅行が必要と考えられる。

だが、出国率の推移をみると、この20代の出国率が下がってきている。図表2は、男女合計の5年ごとの出国率の推移を10歳単位で示したグラフである。このグラフを見ると20代前半が低いので、近年は40代が20代を抜いているように、20代の出国率が低下してきていることが明らかにわかる。他の年代は、30代が漸減しているほかは上昇している。他の年代が、上がっていることは、喜ばしいが、依然、高い出国率のある20代の若者の出国率が下がってきていることは、海外旅行の振興においては、由々しき問題と考えられる。

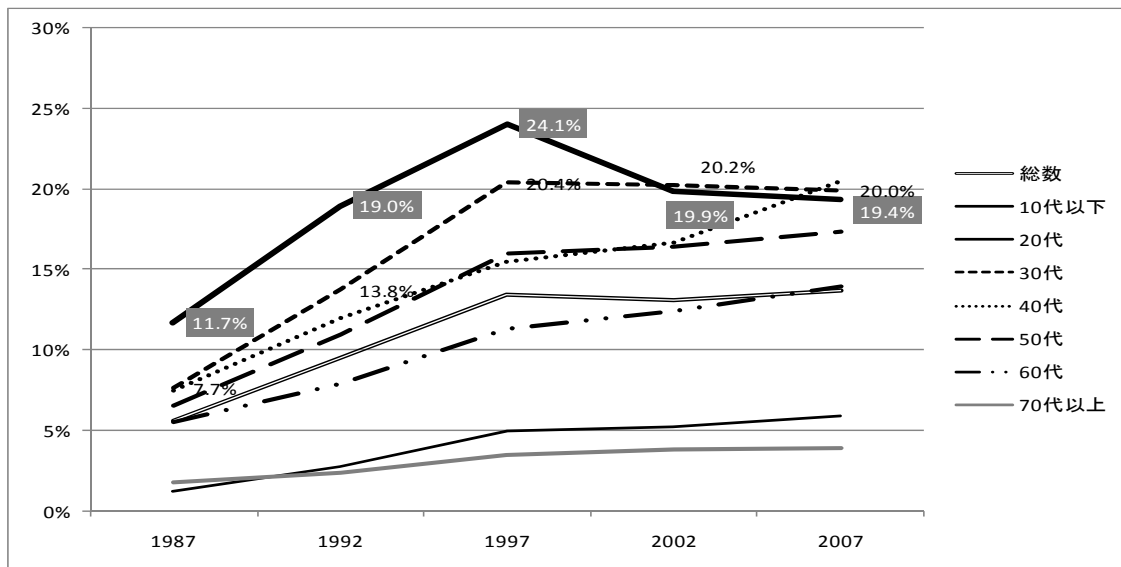
さらに、詳しくみる。図表3は、5年ごと5歳単位男女別で出国率の推移を表にしているものである。

太字で示された率は、各年で最も出国率の高い年齢層の率である。男女計をみるとどの年も25～29歳が最も層となっている。また、女性も、どの年も25～29歳が最も層となっている。5年経つと5歳年をとるので、表中の同じパターンのセルは、基本的に同一人のグループということになる。女性は、25～29歳から年齢層が上がると出国率が下がっているが、5年前に高い出国率を示していたら、5年後も相対的に高い出国率に留まる。一方、男性は、年齢層が上がることで出国率が高まる傾向もみられるが、これも、5年前に高い出国率を示していたら、5年後も相対的に高い出国率を示している。

したがって、20代の間によく海外旅行に行っていると、年をとってからも海外旅行に行く傾向があるということになる。

つまり、20代の若者の出国率が低いということは、単に現在の問題だけではなく、将来にわたって、海外旅行者数が伸び悩んでいく恐れがある。その意味においても、旅行業界においては由々しき問題である。

図表2 出国率の推移



※法務省編『出入国管理統計年報』各年版、総理府統計局編『人口推計資料』各年版、
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000000090004&cycode=0> より作成

図表3 若者の出国率の推移

計	総数	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	30～35歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
1987	5.6%	2.1%	10.0%	13.6%	8.3%	7.2%	7.7%	7.3%	6.8%	6.3%	6.1%	4.7%	1.8%
1992	9.5%	4.4%	16.5%	22.0%	15.8%	11.8%	11.7%	12.5%	11.6%	10.3%	8.8%	6.8%	2.4%
1997	13.4%	7.3%	20.4%	27.8%	22.6%	18.2%	15.3%	15.6%	16.9%	15.0%	12.9%	9.4%	3.5%
2002	13.1%	7.9%	16.7%	22.5%	21.1%	19.2%	17.7%	15.7%	16.3%	16.5%	14.2%	10.5%	3.8%
2007	13.7%	8.5%	16.9%	21.6%	20.2%	19.7%	20.8%	20.2%	18.1%	16.8%	16.2%	11.5%	3.9%

男	総数	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	30～35歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
1987	7.1%	1.6%	6.7%	13.5%	11.8%	11.1%	12.2%	11.2%	9.7%	8.1%	8.0%	6.8%	3.0%
1992	11.3%	3.6%	11.2%	20.2%	20.2%	17.0%	17.2%	17.7%	15.6%	13.1%	10.9%	9.0%	3.8%
1997	14.9%	5.9%	13.3%	22.3%	25.3%	24.1%	21.5%	21.1%	21.3%	17.9%	15.1%	11.1%	5.2%
2002	14.8%	6.5%	11.0%	18.0%	22.1%	24.4%	24.6%	21.4%	20.7%	19.9%	16.6%	12.2%	5.4%
2007	16.0%	7.0%	11.5%	17.8%	20.9%	24.3%	28.4%	28.4%	23.6%	20.8%	19.2%	13.2%	5.3%

女	総数	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	30～35歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
1987	4.2%	2.5%	13.4%	13.7%	4.8%	3.2%	3.2%	3.3%	4.0%	4.5%	4.5%	3.3%	1.1%
1992	7.8%	5.3%	21.9%	23.7%	11.3%	6.6%	6.2%	7.2%	7.7%	7.6%	6.8%	5.0%	1.5%
1997	12.0%	8.8%	27.9%	33.4%	19.7%	12.1%	9.2%	10.1%	12.5%	12.1%	10.9%	7.8%	2.4%
2002	11.5%	9.4%	22.7%	27.2%	20.0%	13.9%	10.6%	9.9%	11.9%	13.1%	12.0%	8.9%	2.8%
2007	11.6%	10.0%	22.7%	25.6%	19.4%	15.1%	13.0%	12.0%	12.6%	12.8%	13.2%	9.9%	3.0%

※法務省編『出入国管理統計年報』各年版、総理府統計局編『人口推計資料』各年版、
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000000090004&cycode=0> より作成

3. 若者が海外旅行に行かない理由への意見

では、若者の出国率が低下している理由はどこにあるのだろうか。旅行業界人が集まると、この問題についてさまざまな意見が出る。例えば、休みが取れない、非正規労働者が増えて雇用が安定しない、給料が上がらない、ボーナスがなくなってきた、すなわち、お金がない。あるいは、介護の負担が高まって家を出られない、旅行以外に関心の高いものが多くなった、インターネットがあるので海外にわざわざ行かなくても海外のことはわかるようになった。さらには、ゆとり教育の結果海外の地理や文化への親しみがなくなり興味関心が低下した等などである。

これらの説明は、いずれももっともなように聞こえる。おそらく、若者が海外旅行に行かない理由の要素として、いずれも大なり小なり影響を及ぼしているだろう。しかし、この中で影響力が強い要素はどれなのか、そして、その要素がなぜ影響力を持つようになっているのか、については、答えられる材料は、持っていない。

そこで、若者が海外旅行に行かない理由の要素として、影響を及ぼしているものを探るために、アンケート調査を実施した。

調査は、株式会社マクロミルに調査の実施を依頼したが、アンケートは、調査票を作成することから始まる。若者が海外旅行に行かない理由として考えられる要素は、上述のように思いつくままにはあげることができる。だが、準備段階で主要な要素をとりこぼすと問題なので、関係者が集まってその候補を探索するためのブレインストーミングを行った。そうして、2008年7月に全国の15才～39才の男女を対象にインターネットリサーチを実施して4740サンプルを集めた。

4. マクロミル「海外旅行に関する調査」調査報告書概要

本章では、マクロミルがアンケート調査に基づいて作成した「海外旅行に関する調査」調査報告書の要点を示す。

1) 回答者の概要

「海外旅行に関する調査」調査報告書3頁に示されているように、アンケートは、男女半々、15才～39才を5歳刻みの年齢層でその標本が等分されるように取得された。報告書の5頁をみると、37.8%が海外旅行未経験者で、海外旅行経験者の平均旅行回数は3.9回であり、直近3年以内では、平均1.3回海外旅行に行っている。なお、直近の海外旅行が、プライベート目的であった約6割がパッケージツアーを利用しているが、その中の約6割が添乗員なしの旅行であった。

2) 海外旅行未経験者の特性

6頁上段は、海外旅行対する興味、海外旅行意向、現実的な海外旅行意向の順でグラフ

が並んでいる。ここでは、海外旅行経験を、「未経験者」、「1回」、「2回以上」に分けて数値を表しているが、興味、意向、現実的な意向いずれも未経験より1回が、1回より2回以上が高い。これは、当然ともいえるが、通常、興味、意向、現実的な意向は、興味を示した中から意向が生まれ、そして状況を勘案して、現実的な意向に結びつき、それは、徐々に狭まっていくものと考え。ところが、本調査の興味と意向の一番強い部分、すなわち、「興味がある」と「行きたい」の割合であるが、未経験者では「興味がある」より「行きたい」の方が小さいものの、「1回」、「2回以上」では、「興味がある」より「行きたい」の方が大きい。もっとも、それぞれ「やや」までいれると徐々に狭まっているし、回答者の捉え方に左右されているかもしれないので、さらに精査が必要であるが、この結果を見た限りでは、1回海外旅行に行く強い興味がなくとも海外旅行にもう一度行こうという意思が、働きやすいのではないかと考える。一方、未経験だと興味があっても実際行こうとすると逡巡してしまうことが多いことを表しているのではないかと考える。

6頁下段は、海外旅行の阻害要因を示している。一番多いのは、「海外旅行の旅行代金は高すぎる」という項目だが、これは「未経験者」、「1回」、「2回以上」ともさほど変わらない。次に、未経験者の経験者と異なる特性をみる。この中で、未経験者と経験者とで一番差が大きいのは、回答率そのものは小さいものの「海外旅行に行くことが、自分にとってどのような価値があるのかわからない」である。つづいて、「休暇があつたら、海外旅行に行くよりゆっくりしたい」である。価値が見いだせない、海外旅行ではゆっくりできないという見解は、経験した結果、そう判断したなら客観性をもつかかもしれないが、未経験の段階では、食わず嫌いの場合もあるだろう。「海外の環境の変化に対応するのが面倒くさい」も差が出ているがこれも同様である。1回海外旅行に行ってしまうえば強い興味がなくとも海外に一度行こうという意思が働きやすいという上段の結果からの推測を前提とすると、未経験者には、まず、最初の海外旅行へのモチベーションをいかにして与えるかがポイントになってくる。このほか、未経験者の特性で表れている「海外旅行よりも他のレジャー・趣味に優先的にお金をかけている」「海外旅行より国内旅行の方が楽しめる」についても同じことがいえよう。ただ、この項目は、「1回」経験者においても、高めの値が出ており、単純に考えると、この方たちは1回海外旅行に行つて懲りた人たちだろう。悪い印象は何だったか、それを払拭させるには、どのようなアプローチが求められるのか、をこの層に対しては考えなくてはならない。

3) 海外旅行2回以上経験者の勤務状況

9頁のグラフは、正社員・契約社員で取得日数認知者に限られるが、年間有給取得日数を示したものである。取得日数は、平均12.9日と観光白書で示されている平成18年の労働者1人平均である8.3日より多い²。これを下段の海外旅行経験別にみると、海外旅行経験が多いほど平均日数が多く、多い日数のゾーンが占める割合も海外旅行経験が多いほうが高い。

一方、10頁のグラフは、有職者の1日平均の労働時間を示したものである。こちらを海外旅行経験別にみると、海外旅行経験者が1日平均の労働時間が長い傾向にあることがわかる。

これらをまとめると、海外旅行経験が豊富な人は、よく働きしっかり休む傾向にあるということがいえよう。

もちろん、しっかり休むのは、海外旅行に行くために休むのか、休めるから海外旅行に行けるのかは、さらに精査しなければならないが、前者であるとしたら「休みが取れないから旅行に行けない」という理由は、海外旅行に行く意思が強くないという意味に置き換えられる例も少なくはないと言えることになるのではないだろうか。

4) 海外旅行2回以上経験者の性向

本節では、海外旅行経験別の消費性向、すなわち何にお金をかけているかという問いについての回答をみってみる。

16頁をみると、海外旅行2回以上経験者は、「グルメ・外食」、「交際費・デート費」、「貯蓄・財テク・投資」、「美容」で相対的にスコアが高く、未経験者は、特に、「グルメ・外食」で相対的なスコアが低い。また、差は比較的小さいが、未経験者の携帯電話、インターネットなどの「通信費」に相対的にスコアが高く現れている。

しかし、これらの傾向は、海外旅行経験者の傾向というより、単に、お金を持っている人が、海外旅行経験者に多いという結果かもしれない。未経験者に「通信費」が高くスコアが現れているのは、お金がないので同じだけ払っていても高く感じているだけであるということも考えられる。実際、14頁をみると、一ヶ月に自由に使えるお金は、海外旅行経験が豊富なほど高額な傾向になっている。16頁で現れた、海外旅行経験者の性向は、海外旅行を志向する性向から直接導かれたものであるかは、精査してみる必要がある。

そこで、「一ヶ月に自由に使えるお金」とこれらの「消費性向」とをクロス集計してみる。図表4をみると一ヶ月に自由に使えるお金が多い層は、概ね「グルメ・外食」、「交際費・デート費」、「貯蓄・財テク・投資」、「美容」のスコアが相対的に高い傾向がみられるが、「通信費」には、上記で想定した内容を裏付ける結果とはならなかった。

なお、17頁の接触情報源のグラフは、2回以上の海外旅行経験者に「フリーペーパー」や「交通広告」に接触している割合が相対的に高いことを示している。これは、海外旅行経験者に、情報を取りに行こうとする性向が強いということを示しているのかも知れない。

5) 年齢、性別、就業状況、世帯年収と海外旅行回数

20頁は、年齢、性別、就業状況、世帯年収と海外旅行回数をみたものである。

当然ながら、年齢が高くなるほど海外旅行回数は増える。また、20代、30代では男性より女性の方が、海外旅行回数が多いことは、先に見た出国率のデータからみても、順

図表4 自由に使えるお金と消費性向

		Q9 あなたは、普段、以下の様々な項目に、どの程度「時間とお金」をかけていますか。			
		かなり「時間とお金」をかけている	ある程度「時間とお金」をかけている	あまり「時間とお金」をかけていない	「時間とお金」をかけていない
【通信費(携帯電話、インターネットなど)】					
全体		6.6	36.7	43.8	12.9
Q8 自由に使えるお金の額を月にお知らせください	1万円未満	7.8	32.9	37.9	21.3
	1~2万円未満	6.6	34.5	44.2	14.7
	2~3万円未満	6.0	39.1	45.0	9.9
	3~5万円未満	5.4	39.5	46.6	8.5
	5~10万円未満	6.1	37.8	47.4	8.8
	10~20万円未満	8.8	37.2	48.2	5.8
	20~30万円未満	8.3	50.0	33.3	8.3
	30万円以上	11.1	37.0	29.6	22.2
【交際費・デート費】					
全体		5.8	26.7	36.7	30.9
Q8 自由に使えるお金の額を月にお知らせください	1万円未満	1.7	14.4	30.8	53.1
	1~2万円未満	4.0	19.5	42.5	34.0
	2~3万円未満	6.8	27.3	40.6	25.3
	3~5万円未満	6.7	34.7	37.5	21.1
	5~10万円未満	9.7	39.9	34.3	16.0
	10~20万円未満	12.4	38.5	31.4	17.7
	20~30万円未満	8.3	30.6	38.9	22.2
	30万円以上	11.1	40.7	33.3	14.8
【グルメ・外食】					
全体		6.1	37.1	40.1	16.8
Q8 自由に使えるお金の額を月にお知らせください	1万円未満	1.5	24.0	41.8	32.7
	1~2万円未満	5.0	31.2	46.1	17.7
	2~3万円未満	6.2	41.7	41.5	10.6
	3~5万円未満	6.3	43.1	39.4	11.1
	5~10万円未満	9.7	48.0	33.9	8.5
	10~20万円未満	17.3	48.2	27.9	6.6
	20~30万円未満	19.4	36.1	30.6	13.9
	30万円以上	11.1	48.1	25.9	14.8
【貯蓄・財テク・投資】					
全体		6.4	20.5	30.7	42.5
Q8 自由に使えるお金の額を月にお知らせください	1万円未満	2.3	10.9	26.7	60.1
	1~2万円未満	4.2	17.5	32.6	45.7
	2~3万円未満	6.7	21.0	31.6	40.7
	3~5万円未満	7.2	24.7	33.8	34.2
	5~10万円未満	9.2	29.2	30.9	30.7
	10~20万円未満	16.8	28.8	29.6	24.8
	20~30万円未満	30.6	41.7	5.6	22.2
	30万円以上	25.9	33.3	22.2	18.5
【美容(美容院、化粧品、エステなど)】					
全体		2.2	19.8	43.5	34.6
Q8 自由に使えるお金の額を月にお知らせください	1万円未満	1.2	11.6	41.4	45.8
	1~2万円未満	1.6	16.3	45.4	36.6
	2~3万円未満	2.0	21.1	44.9	32.0
	3~5万円未満	2.1	22.3	44.5	31.1
	5~10万円未満	3.5	28.0	44.2	24.4
	10~20万円未満	6.2	31.4	38.5	23.9
	20~30万円未満	5.6	25.0	27.8	41.7
	30万円以上	0.0	29.6	25.9	44.4

当な結果といえる。

就業状況でみると、未経験者は「学生」に最も多く、「専業主婦」が最も少ない。「正規従業員」と「非正規従業員」とを比べてみると非正規従業員の未経験率は高い。ただ、これらは、年齢に由来する可能性も考慮しなければならない。非正規従業員の未経験率は高いものの海外旅行経験者の平均回数をみた場合、正規従業員と大差はない。

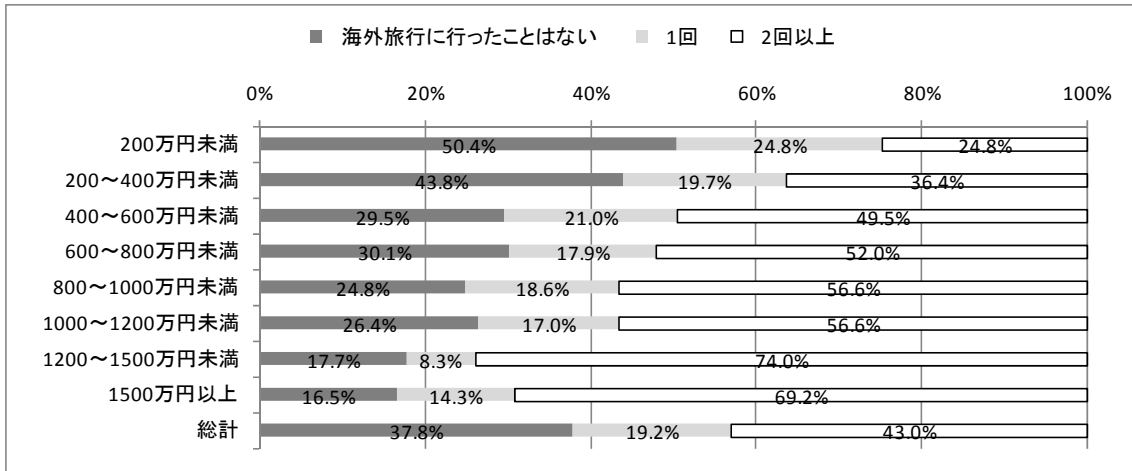
一方、22頁の最近3年以内の海外旅行回数をみると、0回は「学生」が最も少なく、「専業主婦」が最も多くなる。また、「正規従業員」と「非正規従業員」とを比べると、正規従業員の方が、海外旅行に行っていることがわかる。

世帯年収との関係でみる。20頁のこれまでの海外旅行回数をみると、額が上がるにつれて経験が増えている。「400万円未満」の層の未経験率は45.9%であるが、「800万円以上」の層では、10回以上が19.6%に上る。また、22頁の最近3年以内の海外旅行回数をみると、400万円よりむしろ600万円のところで0回の回答率の段差がみられ、600万円未満の層は過半数が最近海外旅行に行っていないことになる。

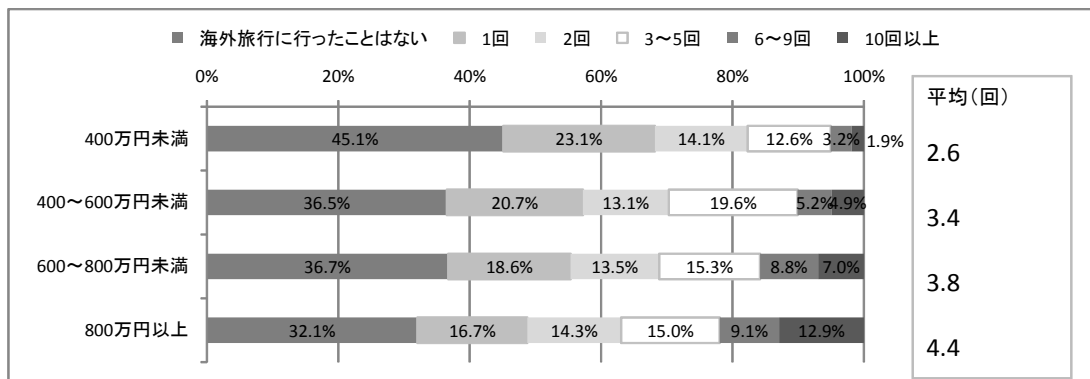
世帯年収と海外旅行回数との関係を、さらに詳しくみる。

図表5 世帯年収/年齢・世帯年収と海外旅行回数

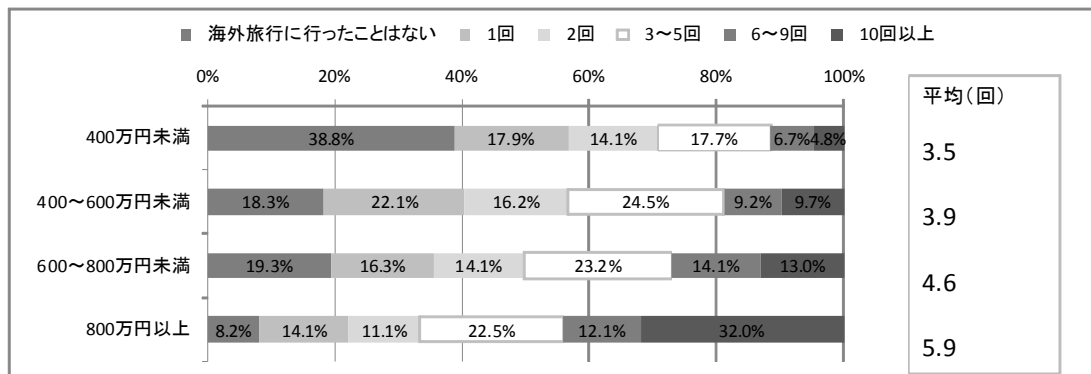
①世帯年収と海外旅行回数



②20代



③30代



図表5の①のグラフは、世帯年収を細分化して海外旅行回数をみたものである。ここでは、400万円と1200万円のところで大きい段差がみられる。世帯年収を細分化して

海外旅行回数をみたものである。ここでは、400万円を超えると海外旅行未経験率が大きく下がり、1200万円を超えると2回以上の割合が大きく上昇する。

さらに、年齢層ごとの世帯年収と海外旅行回数をみてる。図表5の②のグラフは20代の世帯年収と海外旅行回数、③のグラフは30代の世帯年収と海外旅行回数を示したものである。これらを比べると世帯年収の差による未経験者の割合の差は20代では30代より小さい。30代では、未経験率の比較的大きな段差が世帯年収400万円のところでみられ、800万円以上になると高頻度になり傾向がみられる。30代の未経験率は、世帯年収400万円以上になると20代に比べて大きく低下することがわかるが、400万円未満ではさほど低下していない。

以上を総合すると、年収400万円未満の場合、海外旅行を経験していないことが多く、特に、30代で400万円未満の場合、傾向が強くみられる。一方、年収が、30代で800万円以上、あるいは、1200万円を超えると海外旅行に行く頻度が高くなる。一方、最近の海外旅行の経験は、年収600万円以上で平均が1回を超えることから、年収600万円未満の場合は、海外旅行に行く間隔が長くなるのではないかと考えられる。

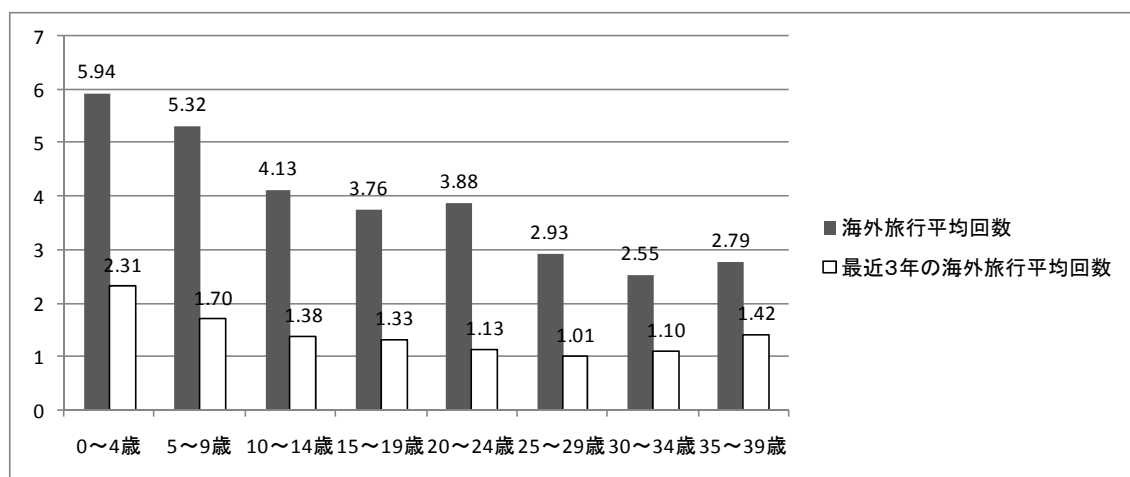
6) 最初に海外旅行に行った年齢と海外旅行回数

23頁は、最初に海外旅行に行った年齢を示したものである。

就業状況別にみると、正規従業員がやや遅めであるほかは、あまり差がみられない。

海外旅行経験別にみると、「2回以上」の方が、早く経験しているが、これをさらにみてる。

図表6 最初に海外旅行に行った年齢と海外旅行回数



図表6は、最初に海外旅行に行った年齢と海外旅行平均回数を表している。ここでは、「海外旅行平均回数」、「最近3年の海外旅行平均回数」とも、幼年期に経験しているほど大きくなっている。ただ、これは、家庭環境の影響が大きいかもしれない。「海外旅行平均回数」

は、20代前半までに経験している方が多いが、「最近3年の海外旅行平均回数」は、「海外旅行平均回数」ほどの大きな違いはみられない。

7) 海外旅行形態

28頁のグラフは、直近の海外旅行形態を示している。

添乗員付きのパッケージツアーの比率の差よりも添乗員なしのパッケージツアーの方で、年齢により違いがよく現れている。ここでは、30代男性、20代、30代女性で添乗員なしパッケージツアーの比率が高いことがわかる。一方、10代では、個人旅行の割合が相対的に大きい。

また、海外旅行のテーマ別では、「世界遺産・名所」で添乗員付きパッケージツアーの比率が高く、「グルメ・ショッピング」、「リゾート（海・山）」で、添乗員なしのパッケージツアーの比率が高く現れている。「テーマパーク・公園」では、添乗員なしの方が多少多いが添乗員付きパッケージツアーと、「イベント・祭典・季節の行事」では、添乗員付きパッケージツアーとパッケージ以外の団体旅行が、「結婚式、家族・親族訪問」では添乗員なしのパッケージツアーと個人旅行が拮抗している。

8) 海外旅行の満足要因

31頁は、直近で行った海外旅行の満足度について項目別に尋ねた結果である。満足した結果の多い項目は、順に「渡航先の自然観光資源」、「渡航先の人文観光資源」である。また、満足した結果の少ない項目は、「渡航先での現地の人々とのコミュニケーション」と「渡航先における現地旅行会社（ガイドを含む）の対応」である。国内における旅行会社の対応と現地旅行会社の対応は、高い満足を与えているとは言い難いが、幸いなことに、特に、国内の旅行会社の対応については不満が少ない。

この結果をみると、自然観光資源、人文観光資源といった海外の観光資源そのものは高い満足度を与えていることがわかる。したがって、海外旅行そのものの素材自体は、魅力的であるという前程は成り立っているといえよう。問題は、その味付けであるが、旅行会社が直接コントロールできる旅行会社の対応は、可もなく不可もなくといったところであるが、不満足の数が多い項目として、「渡航先での食事」が挙げられている。これは「宿泊先のホテル（宿泊施設）」とともに、旅行会社が直接そのサービスを提供するものではないが、企画や交渉、指導で影響を及ぼすことができる項目である。

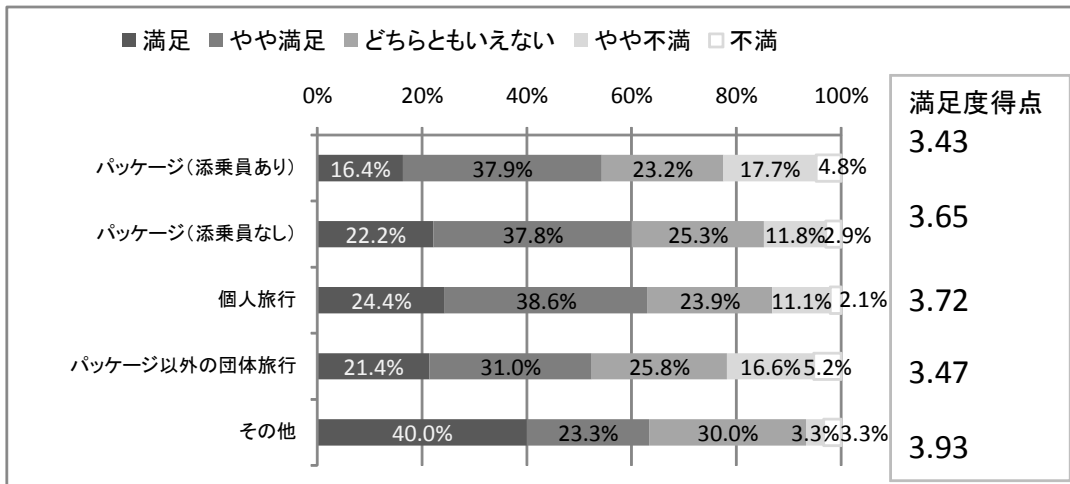
そこで、この2項目をさらに詳しくみてみる。

図表7は、旅行形態別に、①食事、②宿泊の満足度を現したものである。食事、宿泊の満足度は、添乗員付きパッケージツアーとパッケージ以外の団体旅行は、添乗員なしのパッケージツアーと個人旅行より、いずれも低い数値を表していることがわかる。つまり、これは、企画や機関の選定という点で、旅行会社の関与が小さいほうがその満足度が上がるということである。旅行会社が、素人が自ら選んだ食事、宿泊機関の方の満足度が高い

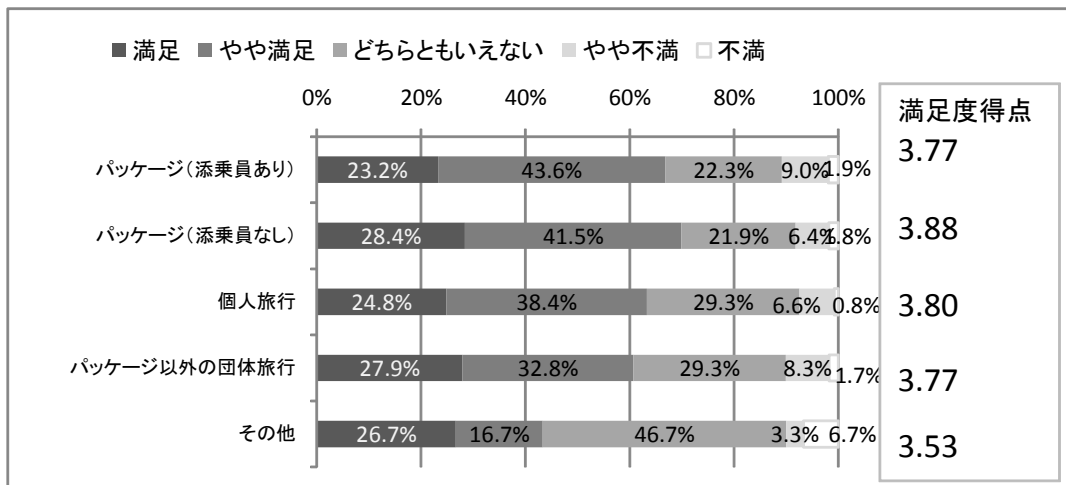
ということは、顧客が旅行会社に期待した選定能力に旅行会社は応えられていないということであろう。この結果には、旅行会社は、大いに反省しなければならないと考える。

図表7 旅行形態別満足度

①食事



②宿泊



なお、32頁のグラフでは、年代別の満足度が示されている。10代の満足度は全般に低く、これが、次の海外旅行へのアクションの障害になるのではないかと懸念が生じる。好印象を与えなかった原因を、さらに、見極めておく必要がある。

9) 海外旅行への興味

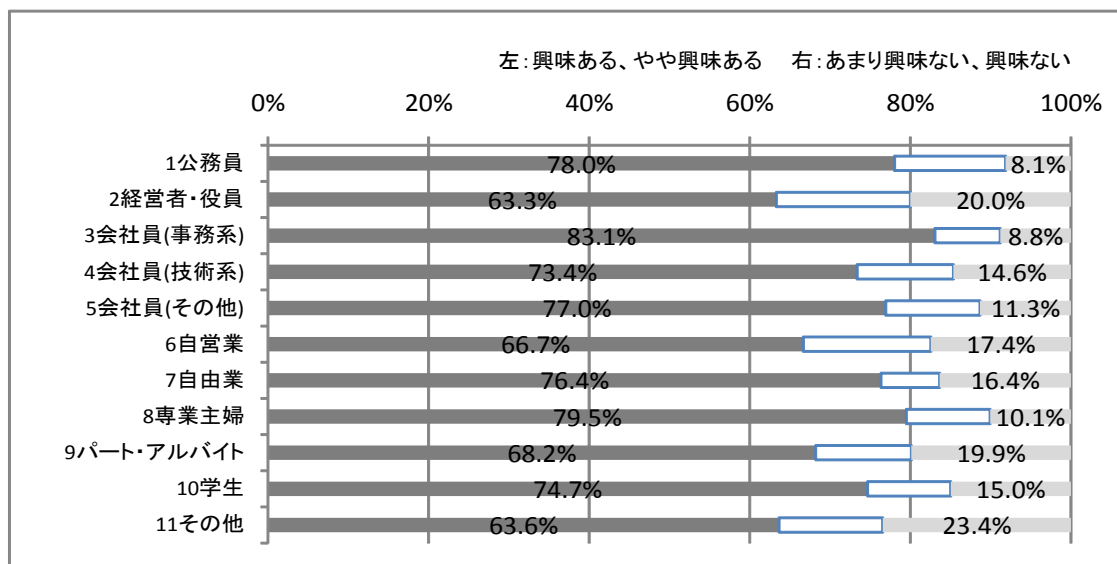
35頁は、海外旅行への興味を示したものである。

このグラフをみると、年代、性別では10代男性でいささか低く、20代女性、世帯別

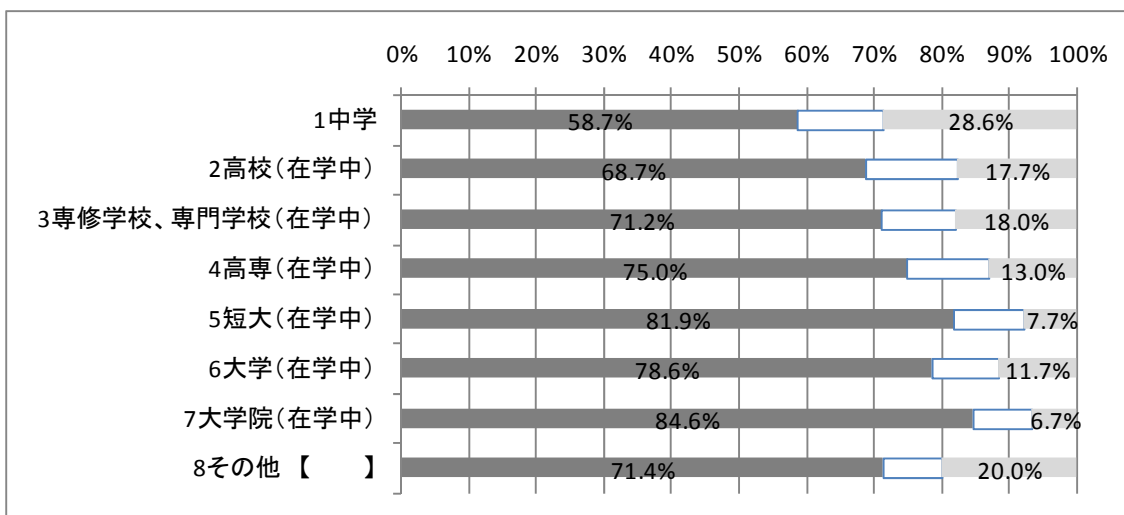
年収800万円以上でやや高いほかは、海外旅行経験別を除いて大きな違いはみられない。
図表8で詳しくみる。

図表8 海外旅行への興味

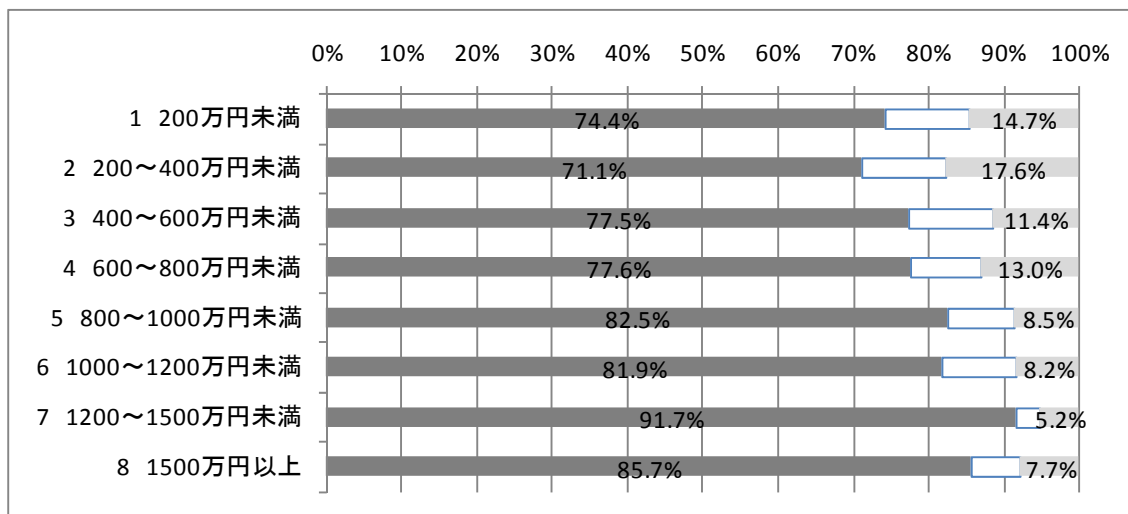
①職業別



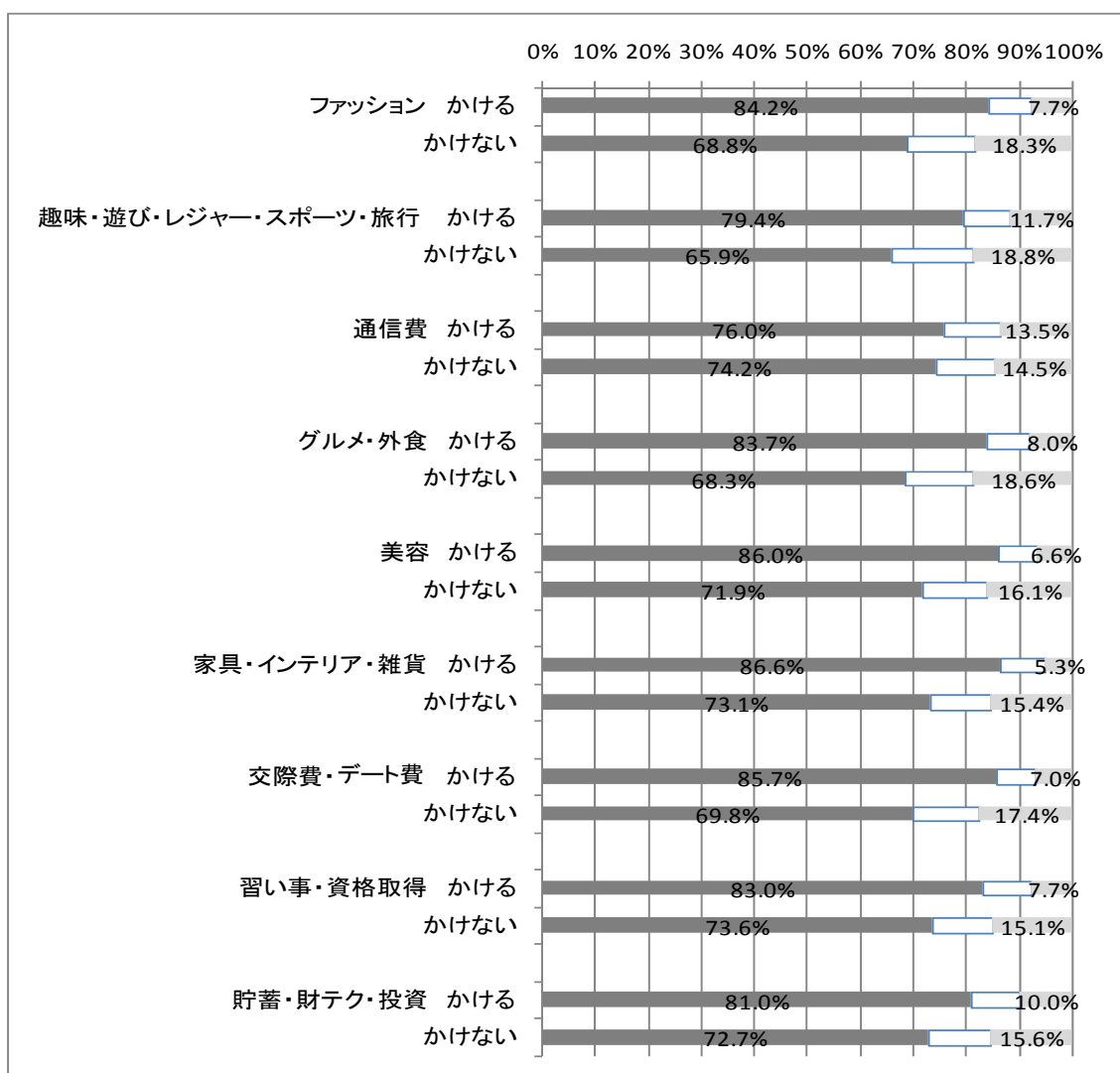
②学歴別



③世帯年収別



④消費性向別



①職業別では、「会社員(事務系)」「専業主婦」「公務員」が高く、「経営者・役員」「自営業」「パート・アルバイト」が相対的には低い。

②学歴別では、概して高学歴になるほど興味は高くなる。③世帯年収別は、高収入の方がおおむね高い。

④消費性向との関係を見ると、各項目とも消費性向が強い層ほど、興味も高いが、通信費についてはその差が小さい。

10) 海外旅行意向

36頁は海外旅行に行きたいかを尋ね、37頁は現実に海外旅行に行けるかを尋ねた結果である。

36頁からは、各年代とも男性に比べ女性のほうが意向が強く、特に、20代では77%が海外旅行に行く意向をもっている。また、職業別にみると、正規従業員は相対的に意向が強いことがわかる。

一方、37頁の現実的な海外旅行意向をみると、性別間で大きな差はみられないものの、年代別では、20代に高い意向がみられる。逆に10代で男性は最も低い。就業状況別にみると、正規従業員が高く、専業主婦は低い。

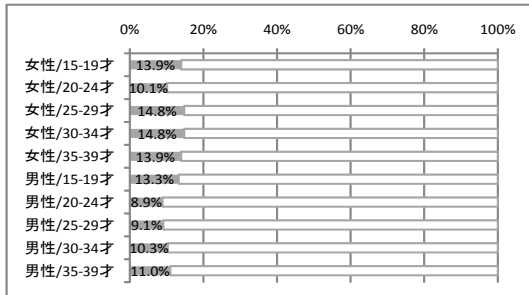
次のこの2つを合わせて、行きたいが行けない人の割合をみしてみる。図表9は、36頁のQ27で「行きたい」または「やや行きたい」を答えたものの、37頁のQ28では、「恐らく行かない」、「行かない」を答えた人の割合である。これらの層は、障害が取れば、海外旅行に行く人たちであると考えられる。

行きたくても行けない人の割合は「年齢・性別」では、概ね、男性より女性の方が高い。「職業別」では、「専業主婦」「パート・アルバイト」で高く、「自由業」「会社員(事務系)」で低い。「就業状況別」では、非正規従業員のうち「パート・アルバイト」では高いが、「契約社員」「派遣社員」では高くない。「有給取得日数別」は、「0日」では高いが、それ以外では特に傾向がみられない。「1日の労働時間別」については、強いていえば、長くなるほど低くなっている。「賞与の有無別」では、ある方が低く、「自由に使える金額別」では、多いほど低くなる。「世帯年収別」では、「400～600万円未満」が最も高くなる。「海外旅行経験別」では、多いほど低くなる。

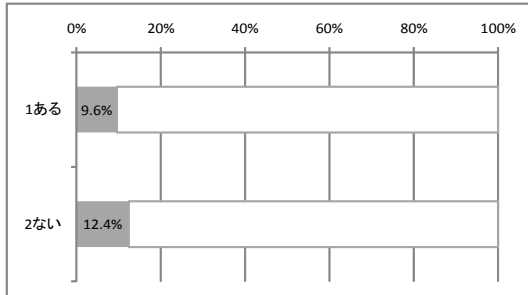
以上をみるとそこそこの自由時間とそこそこのお金の自由があると、現実的に海外旅行に行ける余地が高まってくると考えられる。なお、「400～600万円未満」が最も高いのは、経験があるため意向は強いが、現実の生活環境が意向を実現しない状況であるためと考えている。

図表9 海外旅行に行きたいが行けない割合

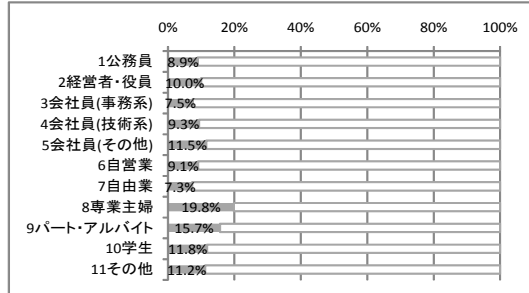
年齢・性別



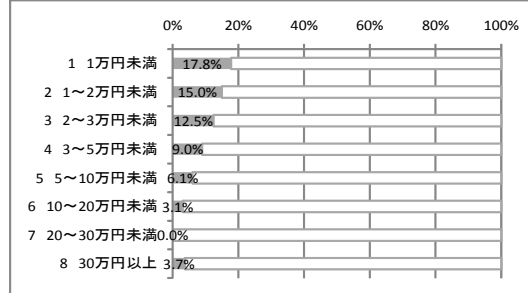
賞与の有無別



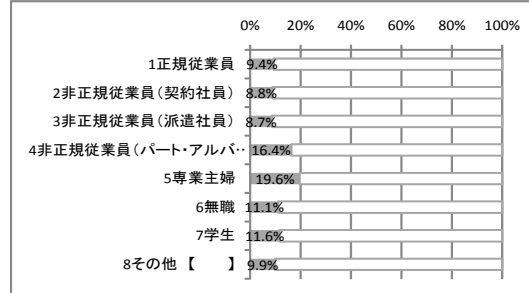
職業別



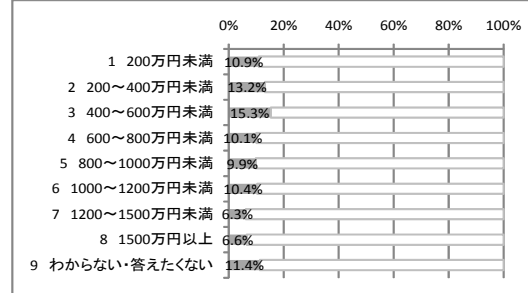
自由に使える金額別



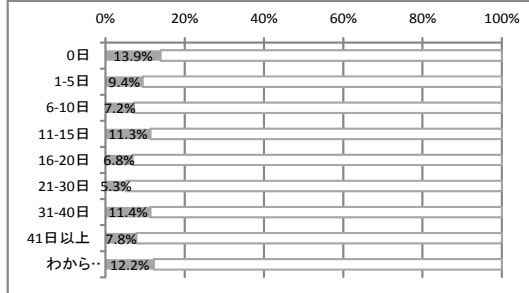
就業状況別



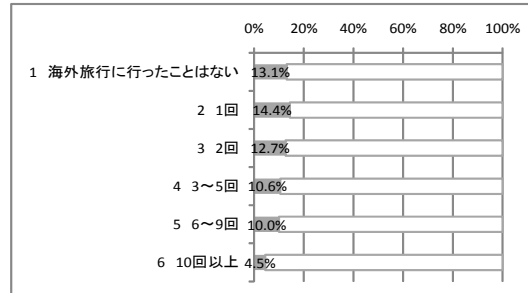
世帯年収別



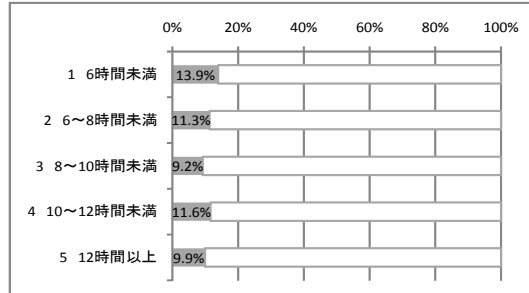
有給取得日数別



海外旅行経験別



1日の労働時間別



1 1) 海外旅行目的

38頁は、海外旅行に行く目的を尋ねたものである。

年代、性別では、30代女性で、特に「リフレッシュするため」が高い回答率が表れている。また、20代女性では、「自分へのご褒美」が、10代では、「自分を高める（レベルアップや知識を深める）ため」が相対的に高い。就業形態別では、「正規従業員」と「専業主婦」で「リフレッシュするため」が、「学生」では、「自分を高める（レベルアップや知識を深める）ため」が相対的に高くなっている。「リフレッシュするため」は、世帯年収別では、高くなるほどその割合が高くなっている。一方、「身近な人に薦められたから」「テレビや雑誌などで話題になっていたから」「店頭やサイトでの評判が良かったから」という受動的目的の割合は小さい。

1 2) 阻害要因

39、40頁は、海外旅行の阻害要因を尋ねている。

39頁で上位に現れた項目をみると、「海外旅行の旅行代金は高すぎる」「パスポート取得、更新手続きが面倒くさい」「海外旅行の旅行代金はわかりにくい」である。

40頁のグラフのセグメントごとの特徴として顕著に現れたものに、年代、性別で「30代男性」に、就業形態別で「正規従業員」に「長期休暇がとりにくい」がある。また、世帯年収別で、「400万円未満」に「余暇・趣味にかけるお金がない」が、「30代女性」と「専業主婦」に「海外旅行に行くには自分が面倒みなければいけない家族が心配」が現れている。

一方、海外旅行未経験者においては、「海外旅行よりも他のレジャー・趣味に優先的にお金をかけている」「休暇があったら、海外旅行に行くよりゆっくりしたい」「海外旅行より国内旅行の方が楽しめる」「海外の環境の変化に対応するのが面倒くさい」「海外旅行に行くことが、自分にとってどのような価値があるのかわからない」といった項目で、他の回答者より相対的に高い割合の回答を得ている。

なお、この質問は、各項目を回答者がどのように感じているか、を尋ねているものであるため、それが、実際に海外旅行に行こうとする意向を阻害しているかは、さらに、精査する必要がある。

1 3) マクロミルの分析

41頁～43頁の分析は、マクロミルが行ったディシジョンツリー分析で、ディシジョンツリー分析の中で代表的なCHAID（チェイド）：Chi-squared Automatic Interaction Detector 使用している。ディシジョンツリー分析は、分析目的の項目（変数）に対して影響のある項目（変数）を樹形図で表す。統計的に影響の強い順に、変数/カテゴリが枝分かれする。CHAID（チェイド）は、 χ （カイ）自乗値を自動的に検出し、統計的に影響の強

い項目を順次選別していくものである。

4 1 頁の分析では、海外旅行に行く意向に最も影響が大きい要因としては、過去の海外旅行経験が示される。それに、一ヶ月に自由に使えるお金の額が影響し、10 回以上の経験者で、一ヶ月に自由に使えるお金の額が10 万円以上ある層は、98.5%に意向ある一方、海外旅行未経験で、一ヶ月に自由に使えるお金の額が1 万円未満の層は、91.4%に意向がない。海外旅行経験が多い層に意向が強いということは当然といえば当然だが、一ヶ月に自由に使えるお金の額が強い影響力を与えている事実は、海外旅行が促進されるためには、まず、経済的環境が整うことにあるといえる。

4 2 頁の分析は、海外旅行経験者の影響要因を示している。海外旅行経験者が、海外旅行に行く意向には、海外旅行より国内旅行の方が楽しめると感じていないことが、最も影響が大きい要因である。国内旅行の方が楽しめると感じていない人にとっては、余暇・趣味にかけるお金がないと感じていないことが次の影響要因となる。本当に求めているパッケージツアーがないと感じている層は、むしろ、海外旅行への意向が強いことが示されている。海外旅行より国内旅行の方が楽しめると感じている層は、休暇があったら、海外旅行に行くよりゆっくりしたいと感じるか、が影響を与えていることがわかる。

4 3 頁の分析は、海外旅行未経験者の影響要因を示している。海外旅行未経験者の最大の影響要因は、海外旅行に行くよりゆっくりしたいと感じるか、である。そう感じない人の中での、次の影響要因は、余暇・趣味にかけるお金がないと感じているか否かである。海外旅行に行くよりゆっくりしたいと感じず、余暇・趣味にかけるお金がないとも感じず、パスポート取得、更新手続きが面倒くさいとも感じない人は、38.1%に海外旅行に行く意向がある。一方、海外旅行に行くよりゆっくりしたいと感じ、海外旅行の旅行代金はわかりにくいと感じ、海外旅行よりも他のレジャー・趣味に優先的にお金をかけていると感じている層は、95.1%に意向がない。しかしこの層においても、海外旅行に興味を持つきっかけがあれば、転向する可能性は感じる。

5. アンケート結果からの分析

本章では、今回、取得したアンケートのデータから、いくつか項目を選んで、満足度に関して重回帰分析を、阻害要因に関して重回帰分析と主成分分析を行ってみる。

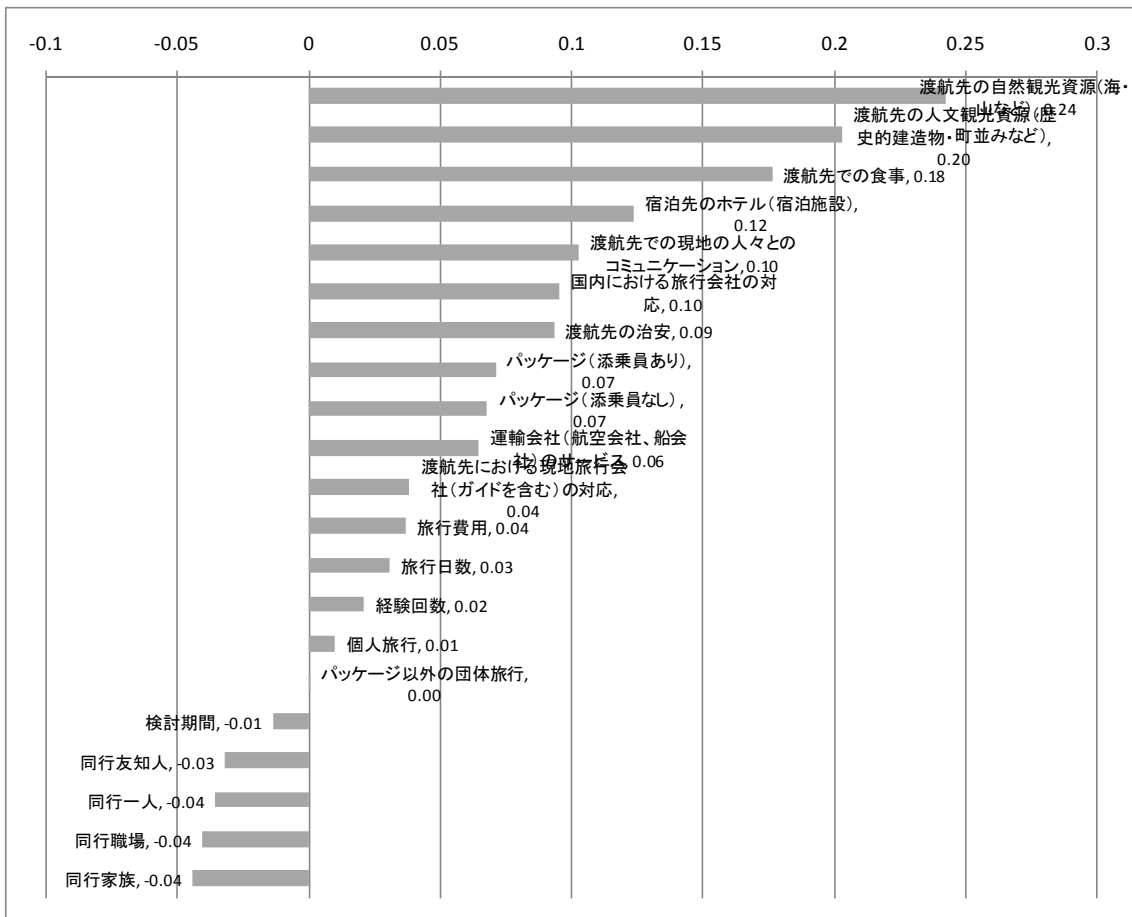
1) 満足度寄与要因

図表 10 は、直近行った海外旅行の総合的な満足度に貢献している要素を求めた重回帰分析の結果である。これをみると「渡航先の自然観光資源」「渡航先の人文観光資源」が総合的な満足度に比較的強く寄与することが示されている。これに、「渡航先での食事」「宿泊先のホテル」が影響を与えているといえる。一方、「旅行費用」「検討期間」「経験回数」「旅行日数」「渡航先における現地旅行会社の対応」などの総合的な満足度への寄与度合いは小さい。この結果は、マクロミルの「海外旅行に関する調査」の結果と一致している。

図表 1 0 総合満足寄与要因

従属変数：直近で行った海外旅行のことについて伺います。総合的に、あなたはどの程度、満足しましたか。

高度数：「満足」への貢献

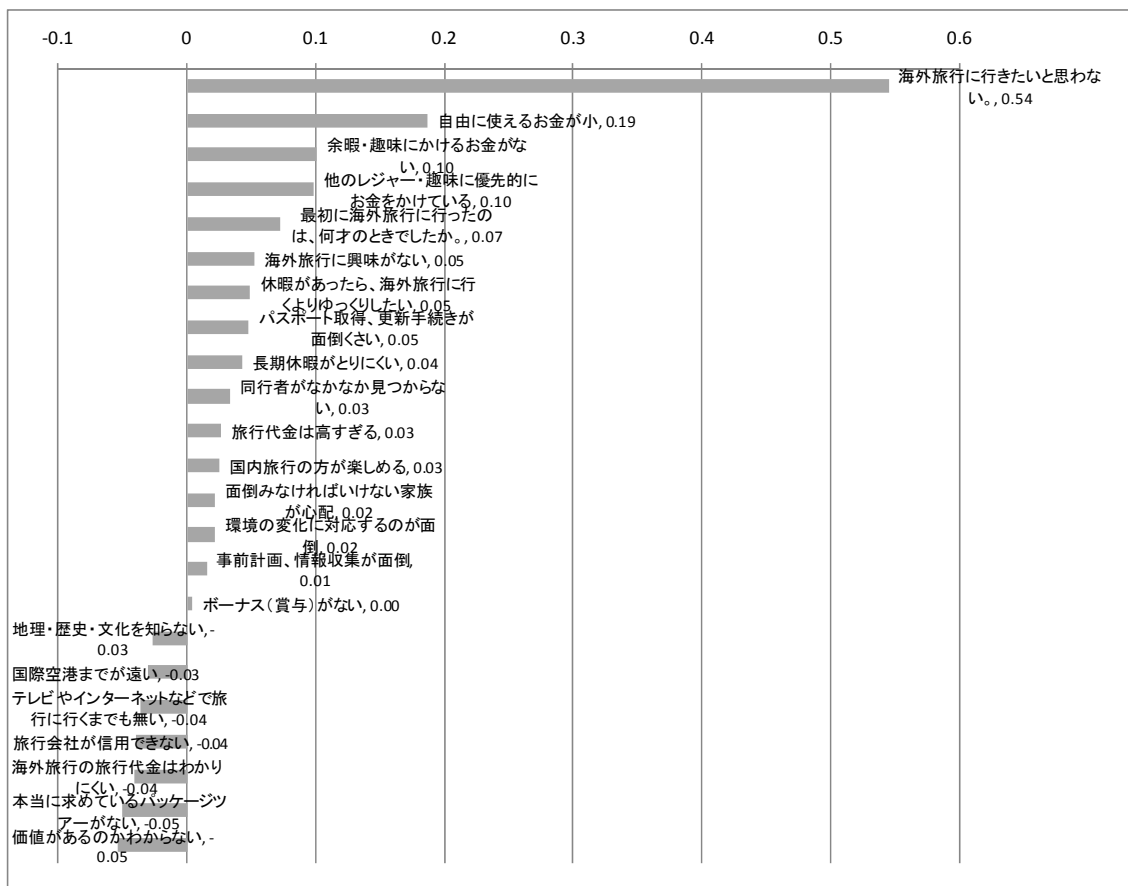


2) 海外旅行意向阻害要因

図表 1 1 は、現実的な海外旅行意向の阻害に、貢献している要素を求めた重回帰分析の結果である。様々な状況を考慮して、現実的に海外旅行に行くか、との問いの否定的な回答に高い寄与を及ぼす要素を求めたものである。最も強く影響を及ぼしているのは「海外旅行に行きたいと思わない」で、意思がなければ実際行かない結果を導くことは当然ともいえるが、このほか、相対的に高い影響を与えているものとして、「自由に使えるお金がない」「余暇・趣味にかけるお金がない」「他のレジャー・趣味に優先的にお金をかけている」が上がっている。やはり、実際、行く意向が生じるかどうかは、金銭的な要因が強いものとみられる。

図表 1 1 現実的海外旅行意向阻害要因

従属変数：様々な状況（仕事、家族、経済的、あなた自身の意志）を考慮して、あなたは現実的に2010年末までにプライベート目的で海外旅行に行くと思いますか。
 高度数：「行かない」への貢献



図表 1 2 は、各項目を要素に主成分分析をしたものである。ここでは、第 1 主成分を①「海外旅行の否定要素」、第 2 主成分を②「海外旅行意向がある時の不満要因」、第 3 主成分を③現実的な「海外旅行意向を生じさせることを阻害する要因」ととらえてみた。

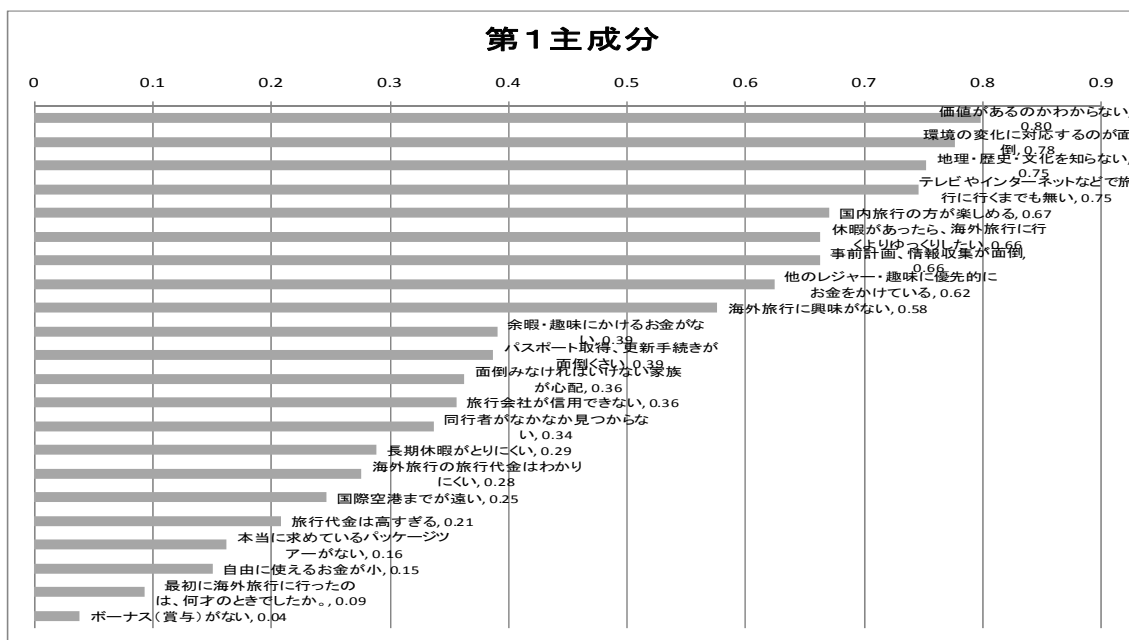
こうみると、海外旅行を否定する要因は「価値があるのかわからない」「環境の変化に対応するのが面倒」「地理・歴史・文化を知らない」「テレビやインターネットなどで旅行に行くまでも無い」「国内旅行の方が楽しめる」「休暇があつたら、海外旅行に行くよりゆっくりしたい」「事前計画、情報収集が面倒」「他のレジャー・趣味に優先的にお金をかけている」「海外旅行に興味が無い」などが高い値を示す。海外旅行に関心を示さない人には、まず、海外旅行に行く意義の啓蒙が求められるといえよう。

一方、海外旅行に行きたいと思っている時の不満要因は、「旅行代金は高すぎる」「海外旅行の旅行代金はわかりにくい」「本当に求めているパッケージツアーがない」「旅行会社が信用できない」などに高い値が現れた。まずは、お金問題が上がってくるが、実際、行

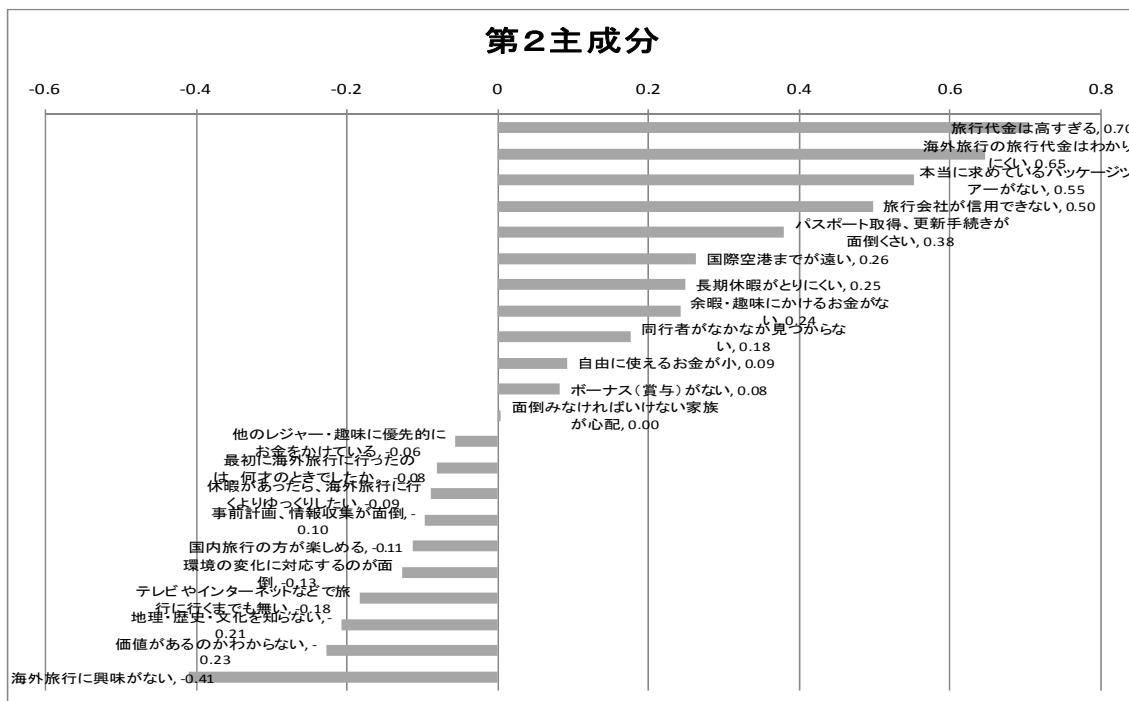
こうと思って、よく考えたら、いいものがない、旅行会社は大丈夫か、との旅行会社にかかわる不満・不安が出てくるものと考えられる。

図表 1 2 阻害要因の分析

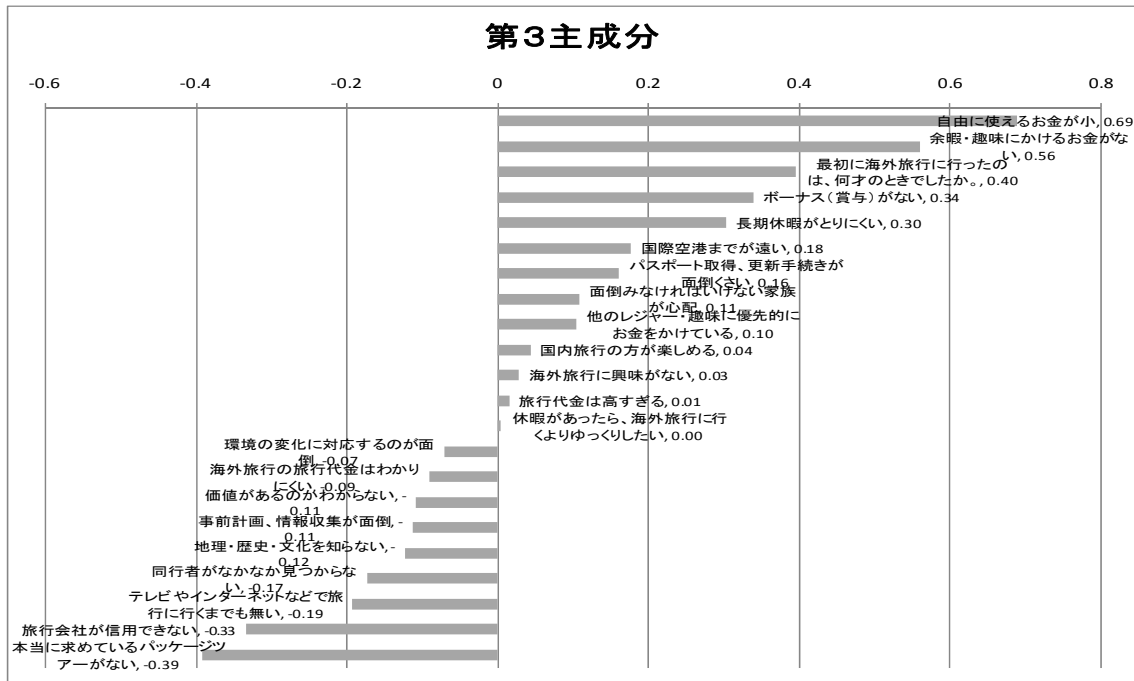
①海外旅行の否定要素



②海外旅行意向がある時の不満要因



③現実的な海外旅行意向を生じさせることを阻害する要因



また、現実的な海外旅行意向を生じさせることを阻害する要因としては、「自由に使えるお金が少ない」「余暇・趣味にかけるお金がない」「最初に海外旅行に行った年齢がおそい」「ボーナス(賞与)がない」など、お金の問題が多く上位に出てくる。

この主成分分析をみると、旅行会社は、いままで、海外旅行に行きたいと思っている時の不満要因には、対応しようと努力してきたと思う。しかし、この克服は、すでに海外旅行意向のある人に対する対応で、同業者間の競争に勝てても、全体のパイは増やせない。海外旅行者数が、伸び悩んでいる今日、「海外旅行を否定する要因」「海外旅行意向を生じさせることを阻害する要因」への対応を考えなければ、2000万人は達成できないだろう。

6. むすび

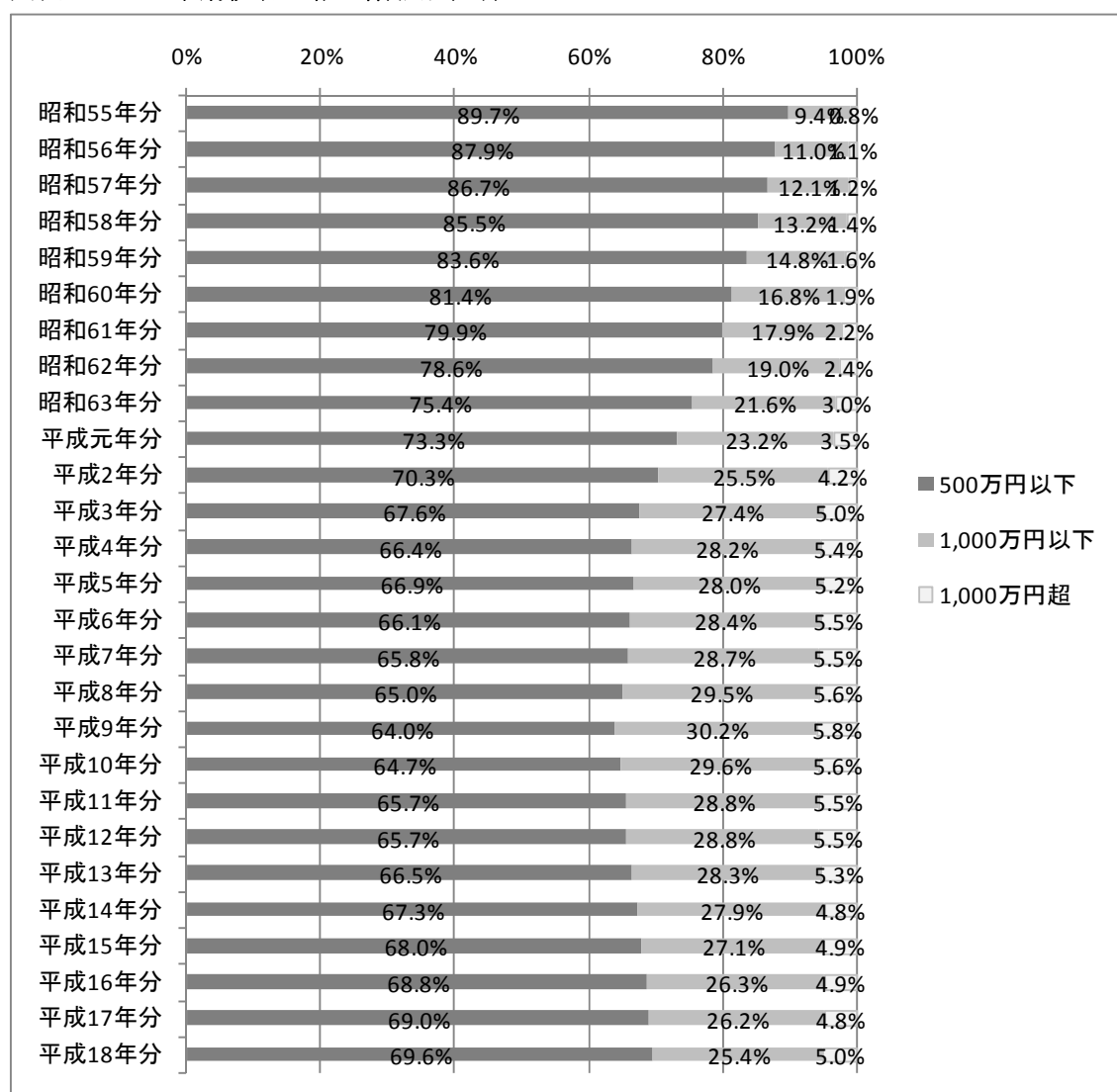
最後に、本稿において行った「若者の海外旅行離れ」の原因についての分析から導かれる結果について述べる。

今回の調査によって、そこそこの自由時間とそこそこのお金の自由があると、現実的に海外旅行に行ける余地が高まってくるものと考えた。世帯年収との関係では、年収400万円未満の場合、海外旅行を経験していないことが多く、年収600万円未満の場合は、海外旅行に行く間隔が長くなるのではないかと判断した。調査を分析すると海外旅行に行きたくても行けない人の割合は、「世帯年収別」では、「400～600万円未満」が最も高くなっている。

一方、若者の海外旅行離れとはいうものの5歳ごとに区切った出国率をみると、2007年も最も高い年代は、「25～29歳」である。これまでは、「30～34歳」の層が次いでいたが、昨年は、「40～44歳」「45～49歳」の方が若干高く、4番目になっているが、25～34歳の年代は、依然、年齢層ごとに見た場合、相対的には、海外旅行によく行く層である。

しかしながら、他の年齢層と比べて、25～34歳の年代の出国率が低下している。つまり、この低下が、海外旅行者数を伸び悩ませていることになるが、なぜ、この層の出国率が低下しているかと考えると、その理由は、上記で示した年収による海外旅行回数、頻度の傾向と結びつくのではないかと考える。

図表 1 3 1年勤続者の給与階級別割合



※http://www.nta.go.jp/kohyo/tokei/kokuzeicho/jikeiretsu/01_02.htm 3-2 1年勤続者の給与階級別給与と所得者数

これをみると、平成9年（1997）までは、500万円以下の層の割合が年々減ってきているが、その後は増え、平成18年（2006）では、5ポイント以上構成比が増えている。1000万円を超える層も減少しているが、約10年で500万円を超え1000万円以下の層が1000万円超の構成比ほど減ったことがわかる。元データの層の区切り方により、ここでは、500万円を線を引いているが、このことは、金銭的には、年収400万円を海外旅行に行くことに抵抗が少なくなり、600万円あたりから海外旅行頻度が高まるという分析に合わせると、500万円を超え1000万円以下の層が減ったことが、海外旅行者数を向上させない最大の原因であると考えられる。つまり、年収400万円に届かない層が増えたから、自分のお金で海外旅行に行く「25～29歳」の出国率が下がる。600万円あれば、さほど負担を感じずに海外旅行に行けるが、500万円を超える層が減ったため、特に「30～34歳」の層の出国率を抑える、ということになっているのではないだろうか。

海外旅行へ駆り立てることを阻害する要因は、いくつかの段階的に応じて考えなければならない。まずは、海外旅行に関心を持つか、の段階。ここでは、海外旅行への価値の意味づけが必要である。つぎに、行きたいという気持ちを現実化させるとき。これは今まで述べたようにお金の問題が大きい。しかし、旅行代金そのものについては、具体的に検討する段階では、高く感じるが、これは不満であって阻害要因ではないと考える。つまり、海外旅行を現実化させるお金の問題とは、旅行代金そのものではなく、自らの収入の問題で、この問題にいかに向かいあうかが、「若者の海外旅行離れ」克服への課題であろう。

¹ JATA『数字が語る旅行業2008』（JATA、2008）81頁。

² 国土交通省『平成20年版観光白書』（コミュニカ、2008）104頁。